

生活科における気づきを深める学習について

- 大学と連携した授業への取り組み -

谷田順子*・高橋千枝**

Lessons for Enhancing Awareness in Living Environment Studies -An Attempt for Developing Curriculum in Cooperation with University-

TANIDA Nobuko*, TAKAHASHI Chie**

キーワード：生活科，気づき，児童，連携

Key Words: Living Environment Studies, Awareness, Pupils, Cooperation

I. はじめに

1. 小学校学習指導要領における生活科の意義

平成元年の小学校学習指導要領で生活科が新設され、教育現場では試行錯誤の中、生活科における様々な教材研究がなされてきた。そして20年が経過した平成20年に小学校学習指導要領は改定され生活科は3つの基本方針を提言した。1つめは「具体的な活動や体験を通して、人や社会、自然とのかかわりに関心をもち、自分自身について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせるといったその趣旨の一層の実現を図るため、人や社会、自然とかわる活動を充実し、自分自身についての理解などを深めるよう改善を図る」ことである。また2つめは「気づきの質を高め、活動や体験を一層充実するための学習活動を重視する。また科学的な見方・考え方の基礎を養う視点から、自然の不思議さや面白さを時間する学習活動を取り入れる」ことである。そして3つめは、「児童を取り巻く環境の変化を考慮し、安全教育を充実することや自然の素晴らしさ、生命の尊さを実感する学習活動を充実するとともに、幼児教育との連携を図り、異年齢での教育活動を一層推進する」ことである（小学校学習指導要領解説 生活編，2008）。これまでも生活科では直接体験による気づきを大切にしてきたが、平成20年の改定はより充実した生活科の実現に向けて、そして気づきの質についても言及し、これら3つの基本方針が提言されている。これらの基本方針から、生活科が小学校へ入学したばかりの子ども達にとって大変魅力的な教科であり、また重要な教科であることがわかる。

また近年の学校教育にとって重要な課題となっている社会性を育むことも、生活科を中心とした学びが重要であると考えられる。長崎（2013）は、幼児期や児童期において人と何かを共にし、またそのことを楽しむこと、共に在ると感じられることが社会性の基本であると述べている。児童期は「いま、ここ」の現実的世界や経験的世界から離れて、論理的、抽象的な思考が可能になる時期である。しかしながら、幼児期の姿を残しつつある児童期初期の子ども達は、まだ発達の不安定なところがあり、それゆえ直接的な経験を通して楽しさを実感することが児童期初期の子ども達の思考の助

* 鳥取大学附属小学校

** 鳥取大学地域学部地域教育学科

けになる。そして経験による実感が土台となって、気づきの質を高め、さらには生活科だけではなく学習全体の取り組み方にも影響を及ぼすと考えられる。このように児童期の発達の側面から考えてみても、生活科が重要な教科であることがわかり、小学校低学年では経験を重視する生活科を中心とした学習の展開が必要になってくるのである。これらを受けて、鳥取大学附属小学校の生活科では、「身近な人々や社会、自然と直接かかわる活動や体験をもとに、気づきの質を高め、自分の生活に活かすことができるような単元を構成する」という努力点を掲げている。

2. 生活科における大学探検の位置づけ

前述したように生活科では直接体験に基づく気づきの質の深まりに着目している。白樫 (2008) は気づきが生まれる条件として、以下のような8項目を挙げている。1. 子どもたちが制限されない自由な活動が保障されたとき、2. 子どもたち一人一人の感性が活動の中で発揮できるとき、3. 子どもたちが未知と遭遇できる場面が多くあるとき、4. 子どもたち自身で学びが確認できたとき、5. 場面や状況が子ども自身の中で確認できたとき、6. グループの編成がうまくいったとき、7. 探検活動等で生まれた不思議が次の不思議へ発展したとき、8. 子どもたちが活動に没頭し、物事や人物になりきったとき、である。大学探検は文字通り探検であるため、子どもたちが主体的に未知の場所へ外向き、直接見て、聞いて、触れるといった活動が必ず取り入れられる。また大学探検は学校外での活動のため、子どもたちは教室での学習以上に期待を持って臨む。以上のことから生活科における大学探検は、直接経験に基づき、気づきを深めるための有効な活動といえる。

また鳥取大学附属小学校は鳥取市内およびその周辺の広範囲から児童が集まってくるため、校区がないとあってよいほど広い。そのため児童は「自分が生活している地域」として自分の所属している小学校の周辺地域に親しみを持つことができず、結果近隣住民や公共交通機関から注意を受けることも残念ながら時折見られる。附属小学校の児童にとって、鳥取大学は見慣れた場所ではあるが、親しみもてる安心した場所とは言えないのかもしれない。子ども達にとって「居場所がある」ということは、自分の存在価値や将来展望の意味も含む (荻原, 2013) ことから、鳥取大学も含めた小学校周辺を児童が居場所として認識すれば、児童はより一層安定した小学校生活を送ることができるのではないだろうか。このような状況の解決に対しても、大学探検が有効な活動になると考える。つまり大学探検を実施することにより、普段登下校している場所や目にしている人々を深く知る機会が生まれ、自分たちの周囲に気づき、周囲との関係を大切にす気持ち芽生え、自分の居場所として認識できるのではないだろうか。

以上のことから本論では、生活科における大学と連携した大学探検の授業が児童の気づきの質をどのように深めていくかについて検討する。具体的には2012年6月～12月までに実施された鳥取大学附属小学校2年生を対象とした大学探検の単元である全15時間を通して、大学と連携した実践研究の試みについて検討する。その際「気づきの質がどのように高まっていくか」「気づきの質が高まったということをどのように捉えたらよいか」「大学との連携がどのように児童に効果的な教材となるか」の3つの視点を中心に検討する。

II. 単元内容

1. 「わくわく大学たんけん」(全15時間)

全15時間の単元を以下のように設定した。

- (1) 第1次 鳥とり大学ってどんなところ (5時間)

- ①じっしゅうの先生たちにあいはいこう（2時間）
- ②中田先生にあいはいこう（2時間）
- ③見たことを話し合おう（1時間）
- （2）第2次 もっと大学のことをしりたいな（6時間）
- ①自分はどうなことがしたいか考えよう（1時間）
- ②たんけんの計画を立てよう（3時間）
- ③グループごとに大学たんけんにいこう（2時間）
- （3）第3次 見つけたことを伝え合おう（4時間）
- ①見つけたことをまとめよう（3時間）
- ②たんけんほうこくかい（1時間）

Ⅲ. 授業の実際

1. 第一次学習計画（5時間）「鳥とり大学ってどんなところ？」

（1）事前調査と大学見学

第一次学習期間は、実際の大学探検を実施する前の事前学習期間からクラス全体で大学を見学する期間までである。この期間は、児童の質の高い学習へ向けての動機づけを高めることを目的としている。まず大学見学の前に、大学について知っていることとして児童に事前アンケートを実施した。ほとんどの児童が教育実習生（鳥取大学学生）の氏名をあげていた。

事前調査での結果をもとに、まずは教育実習生がどのような勉強をしているのかということを探りにクラス全員で6月27日に1回目の大学見学を実施した。1回目の見学場所は教育実習生が在籍している地域学部に加えて、図書館、食堂、売店、工学部であった。7月9日には2回目の大学見学として、授業時間内でお世話になった農学部の教授がどこにいるのかを探りに農学部フィールドサイエンスセンターと動物病院を見学した。

児童は2回の見学後に振り返りノートを記録した。上記した2回の見学では、児童に「ひと」「もの」「しぜん」に着目させ、メモを取りながら見学させた。見学前のアンケートおよび見学後の振り返りノートの内容を「ひと」「もの」「しぜん」に分け分類した結果を表1に示す。見学の前後でアンケートやノートに記載された内容量が変化していることがわかる。とりわけ、地域学部・図書館・食堂、売店、工学部の見学後は「もの」が増加し、農学部・フィールドサイエンスセンターの見学後は「しぜん」が増加している。しかしながら一方で「ひと」への気づきが少ないこと、また質的な気づきについては有効な指標そのものの検討が今後の授業における課題となった。

表1 見学前後の気づきの変化

| | 見学前 | | | 地域・図書館・ 食堂売店・工 見学後 | | | 農・フィールド 見学後 | | |
|--------------------------|-----|-----|-----|--------------------------|------|-----|----------------|-----|------|
| | ひと | もの | しぜん | ひと | もの | しぜん | ひと | もの | しぜん |
| 振り返りノートへの 記録数 (平均) | 4.4 | 2.1 | 1.7 | 4.1 | 17.1 | 6.0 | 1.6 | 6.0 | 14.6 |

（2）大学探検の計画立案

大学探検当日は児童のみで複数のグループに分かれて行動するため、児童のみでのグループディ

スカッションを実施した。グループは事前の見学メモや振り返りノート等を参考に児童の興味別(もう一度行ってみたいと思う場所、もっと詳しく調べてみたいと思うこと等)により、自分たちでグループングをおこなった。最終的にグループは8グループ構成された。

各グループ内でまずは自分がどこで何をしたいのかを個別に発表させた。個々の発表後に、どんなことを調査すべきかまたどんなことが出来るか(させてもらえそうか)ということについてグループディスカッションをした。本時では児童が主体的に計画することが気づきの質を深めるための学習意欲につながると考え、教師は最低限の制限をかけるに留め、児童の自主的な発言をできる限り受け止めた。また教師は大学探検本番前に実際に大学へ出向き、何が出来るかということに関してもできるだけ児童の思いを達成させるため、大学教職員へ可能な限りの協力を依頼した。

グループで検討したことを発表し、クラス全体で意見を出し合い共有した。発表後は、探検予定の施設への具体的な質問項目を作成した。さらに各グループで当日のスケジュールも含めた依頼文を作成し、大学探検への期待と見通しを持たせた。

2. 第2次学習計画(6時間)「もっと大学のことをしりたいな」

(1) グループごとに大学探検に行こう

児童が目的意識を持って大学と関わるように、グループの名前は児童自身で考えさせた(表2)。当日は児童のみでかけるため、場所の確認や探検のきまり、挨拶、インタビューの方法などを児童だけで綿密に検討した。またこれが実際の大学探検への高い動機づけにもつながった。

表2 グループ名と探検先

| グループ名 | 探検先 |
|---------------------|----------|
| 工学ぶたんけんたいグループ | 工学部 |
| 地いき学ぶどきどきたんけんたいグループ | 地域学部 |
| ほけんがんばりたいグループ | 保健管理センター |
| 売店たんけんグループ | 売店・パーカリー |
| 大学図書かんグループ | 大学附属図書館 |
| 牛とやさいのたんけんたいグループ | 農学部 |
| 食どうたんけんグループ | 食堂 |
| どうぶつびょういんたんていだんグループ | 動物病院 |

(2) 大学探検

当日(12月13日)は、大学の地図を片手にそれぞれのグループが張り切って出発した。それぞれの施設で実施した内容を表3に示した。ここでは地域学部を中心に論考する。地域学部では幼児教育分野への大学探検となった。児童はあらかじめ用意しておいた質問を緊張しながらも一つ一つ丁寧に質問し、メモを取っていた。担当が帯同しないこともあって、はじめは緊張していたものの、自分たちで挨拶をし、インタビューを実施していくことで、大学教職員や学生とも親しくなり、児童は大学も大学に所属している人々についても好意をもった様子であった。はじめにでも述べたように、このような相互作用が子ども達の周囲との関係の気づきや周囲を大切に思うことへ繋がっていくと考える。また第1次学習計画において課題となった「ひと」への気づきにもつながると考え

る。そしてこれらは小学校の学習指導要領の目標にある「自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などのかかわりに関心を持ち、地域のよさに気づき、愛着をもつことができるようにすると共に、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、安全で適切な行動ができるようにする」といった項目の達成になると考えられる。

また本時の大学探検では、見学やインタビューだけではなく、児童のやってみてみたいと思う気持ちを叶える体験も実施した。地域学部では新生児模型を抱いたり、絵本の読み聞かせをしたり、食堂ではテーブルを拭いたり、売店ではお菓子の棚を整頓したりといったことである。とりわけ地域学部では、最初は単に幼稚園の先生になるための場所と思っていた児童も、直接体験を通して保育者や教師の思いにまで気づくことができたようである。後述する探検後の振り返りやその後の報告会への取り組み状況を見ても、これらの直接経験が気づきの質を深める一要因となっていると考えられる。これはまさに生活科の基本方針であり、大学探検という単元学習の有効性が示唆されたといえる。

表3 大学探検で実施した内容

| グループ名 | 内容 |
|---------------------|------------------------------|
| 工学ぶたんけんたいグループ | 棟内の見学・缶バッジ作成 ロボット体験 |
| 地いき学ぶどきどきたんけんたいグループ | 保育実習室見学・読み聞かせ 手遊び・新生児ケア体験 |
| ほけんがんぱりたいグループ | 施設内見学・視力／聴力検査 身長／体重測定 |
| 売店たんけんグループ | 店内見学・商品整理体験 |
| 大学図書かんグループ | 館内見学・職員との質疑応答 |
| 牛とやさいのたんけんたいグループ | 動物見学・農作物収穫体験 |
| 食どうたんけんグループ | 施設見学・食堂清掃体験 店員体験 |
| どうぶつびょういんたんていだんグループ | 病院見学・顕微鏡体験 |

3. 第3次学習計画（4時間）「見つけたことを伝え合おう」

（1）大学探検の振り返り

第3次では気づきの深まりを他者に伝えること、そして他者と共有することを目的とした。また教師は児童の気づきの質や深まりを確認することに重点をおいた。大学見学と大学探検との振り返りを比べると、児童の気づきの深まりがみてとれる。例えば、保健管理センターでは「保健室のようなところ」から「大学生は保健管理センターの人たちに見守られて、安心だなと思いました」へ、また、地域学部では「学校の先生になる場所」から「子ども達がうれしいときも泣いているときも、先生の子どもの思う気持ちはたくさんだということがわかりました」といったように、大学で学ぶ

「ひと」についての気づきが生じたと共に、「ひと」の思いにまで気づけるようになっていた。自分達で質問を考え答えを導き出していったことにより、深い気づきにつながっていったと考えられる。また質疑応答という形での大学教職員との相互作用を通して気づきを深めていったのではないだろうか。

(2) 探検の報告

大学探検後、「たんけんほうこく会」を実施するため、各グループで報告準備を行った。これは学習指導要領にある「身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの方法により表現し、考えることができるようにする」という目標を意識しての活動である。報告内容は模造紙やクイズ形式、大学探検時の再現等の形で報告された。児童が自主的にまとめの活動に取り組めたのも、自分たちの思いや願いが実際の探検で叶えられ、児童の達成感につながったことが要因と考えられる。さらに「たんけんほうこく会」では、「牛（牛とやさいのたんけんたい）が病気になると動物病院（どうぶつびょういんたんていだん）で診てもらうことになる」といったようにそれぞれのグループが気づきを共有するだけでなく関連させる場面もあった。また「農学部で作られた野菜が小学校の給食に入っている」というように探検をして明らかとなった内容と自分たちの生活を関連させることもできた。それぞれのグループが気づきを表現し合うことで、気づきの共有・関連へと発展し、集団における気づきの質的な高まりも確認できた。また「将来工学部で勉強したい」という大学への憧れを持つ児童もみられた。

IV. おわりに

大学探検は2000年に初めて実施されて以降（木下、2000年）、毎年実施されており、子どもたちも楽しみにしている単元の一つである。そのような状況の中で、今回の大学探検は「大学」という場所が「教材」として活用できること、すなわち児童の気づきを深めるために適した教材となりうることを改めて確認する良い機会となった。また大学探検前に予め大学構内を見学したり、振り返りノートを作成したり、さらには児童の主体性によるディスカッションを実施するといったように「大学探検」という一つのテーマについて繰り返し考察をするということが児童の動機づけやさらには気づきの深まりにつながることも明らかとなった。

また児童の保護者からは大学探検がとてもよかったという話をいただいた。きっと家庭へ戻った後、児童が生き活きと大学探検の様子を語り、大学への愛着や将来の児童なりの見通しや期待を持つことができたのではないだろうか。

今後はさらに大学の教職員と連携を取り、より充実した教材研究と授業実践を実施していきたい。一方で大学探検に関しては、事前の日程調整や当日の実施内容等、教師や受け入れ側の労力が相当必要になることも今後の課題として考えなければならない。しかしながら担任教師や大学教職員の負担を課題とする以上に、大学を教材として活用できるということを主張したい。今回の授業実践は大学の附属小学校であるからこそ実現可能であったとも言える。このことから国立大学法人附属小学校の意義についてもさらに検討したい。

謝辞

今回の大学探検に関しましてはお忙しい中大勢の方々にご協力をいただきました。鳥取大学技術部部長井藤久雄先生，保健管理センター所長中村準一先生，附属図書館館長矢部敏明先生，工学部知能情報工学科川村尚生先生，農学部附属フィールドサイエンスセンター中田昇先生，生協のスタッフのみなさま，また児童を引率してくれた大学生のみなさまに心より感謝申し上げます。鳥取大学の教職員のみなさまのご協力がなければ，大学探検のような単元学習は成立しません。深く感謝すると共に，今後ともご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

文献

木下伸子 子どもの目 授業の目 15 2000.

長崎勤 第1章 共同行為の始まりー初期社会的認知発達と課題 長崎勤，森正樹，高橋千枝編 シリーズ：発達支援のユニバーサルデザイン 第1巻 社会性発達支援のユニバーサルデザイン 金子書房 2013.

荻原健次郎 第19章 青年期の「居場所」支援 長崎勤，森正樹，高橋千枝編 シリーズ：発達支援のユニバーサルデザイン 第1巻 社会性発達支援のユニバーサルデザイン 金子書房 2013.

白樫静枝 生活科指導法Ⅱー生活科の学習において子どもの気づきを生かす活動と支援についての一考察ー 九州ルーテル学院大学紀要 visio 38 107 - 116 2008.

小学校学習指導要領 生活編 文部科学省 2008.

鳥取大学附属小学校 平成 24 年度実践記録集 子どもたちが確かに思考を高める学び合い（2年次）～教材研究を生かした授業実践～ 2013.

(2013年6月7日受付，2013年6月13日受理)